



分子研の近くて遠い思い出

小林 速男

分子科学研究所 名誉教授
(前 分子集団研究系分子集団動力学研究部門 教授)

こばやし・はやお / 1965年東大理学部化学科卒業、1970年東大理学系研究科科学専攻修了(理学博士)、1970-1971年日本学術振興会奨励研究生、理化学研究所特別研究生、1971-1995年東邦大学理学部、講師、助教授、教授。1995-2007年分子科学研究所教授。1997年日本化学会学術賞、2006年日本化学会賞。現在は日大文理学部客員教授としてCREST研究(最終年度)を遂行している。



毎年心待ちにしていた実験棟の裏庭の木蓮が今年も一杯の白い花をつけ、岡崎での最後の春が巡って来ました。

私が大学院を出たのは37年も前の遙か昔の事です。その頃、近いうちに分子科学研究所が設立されるという話を聞きましたので、分子科学分野の将来は明るいと気軽に考え、翌年、それまで知らなかった私大(東邦大)に迷わず(?)就職しました。今では私大の研究環境は全く変わり、特にこの10年程の変化は著しいと思いますが、当時は、幾つかの大学を除けば私立大学の研究環境は非常に整って居らず、大学院を出たばかりの若い研究者が研究を行っていくことはかなり困難でした。しかしこのような状況の中でも私が頑張れたのは、就職した大学の先生方や周囲の方々の援助のお蔭ですが、同時に分子科学の将来に希望を持っていたお蔭でもありました。その意味で、私は分子研には設立以前よりお世話になっていました。しかし、現実は無鉄砲な若者が考えたほど単純なものではなく、私が岡崎にやって来ましたが、大学院を出てから25年も後のことで、研究者としての最盛期はとうの昔に過ぎ、(所属していた大学には身勝手な言い方で大変恐縮ですが)新しい研究場

所を探す努力もこれを限りにしようと、思っていた時でした。つくづく人生はふとした事で大きく変わってしまうこと、一度歩き始めた道を逆戻りする事は不可能であることを感じます。しかし最近では昔とは違い、分子研に来てみたけれど…と、思う方も多いようで、時代が変わったように感じます。

新任教授にとって分子研の最大の欠点は、研究グループの人数が少ない事で、教授、助手(助教)、技術系職員(あるいは博士研究員)の3人体制では、自ら活発に実験できる若い教授でないと折角着任しても新しい試みを行うことは殆ど不可能です。最近はこの欠点を補うために教授と協力する助教の数を2人にする努力もされ始めました。助教のポジションが急速に減ってしまった一般の大学から見れば、夢のような話であろうと思いますが、ともあれその効果に期待しています。後一つの問題は、最近ほどの分野でも、ある程度の成果を絶え間なく挙げていく事が要求されるようになり、得てして言葉だけが先行するような研究が脚光を浴び易く、任期に追われる若い研究者は勿論、シニアな研究者も長期的展望をもって着実な研究を行う事が難しくなりました。しかし一方、多く

の先生が「不自由な中で努力していた時に一番良い仕事が出来た」と言いますし、私も若かった時、ちゃんとした装置は何もない状態で一生懸命仕事をしていて、分野の指導者の先生から(好意的に)「小林さんは装置がないのでその分、一生懸命考えるから良いのだ…」と言われたことがありますので、余り恵まれない方がよいのかも知れません。特に岡崎では「不自由を常と思えば不足なし」という家康の遺訓が常識かも知れません…。…しかし、冗談は別として…、分子研に来て一番嬉しかった事は、分子研の素晴らしい実験環境のお蔭でそれまで進めることが出来なかった研究が一段と進んだ事でした(このような立派な研究所が岡崎に30年以上も前に作られたことに敬意を表します)。また、私が私大で一生懸命積み上げていた蓄積が案外小さくなくなったということを知る機会を得たことも非常に嬉しいことでした。

分子研に来た直後、それまで経験しなかった外部評価を受けましたが、その時に(フランスの友人でもあった)評価委員に、もう少しインパクトファクターが大きなジャーナルに論文を出すように忠告されたことは大変な驚きでした。また、私が委員として参加していた人事委員会で、外部委員が、私達がよく利用していた速報誌に出た論文を「十把一絡げの論文」と評価したのを耳にしたのも驚きで、仕事の評価が別次元の目盛りで決まる世界を知り、カルチャーショック以上のものを感じました。一方これとは反対の嬉しい情報を知ることも出来ました。分子研に来て間もない頃、「研究評価」という本

に出された「論文引用度」が所内で話題になり、その後、論文引用度は分子研の研究レベルの高さを示すデータとして良く耳にするようになりました。その本には全国の国公私立大学および研究所の化学系論文の論文引用度の表が出ていましたが、それによると論文総数が850を越える大学や研究機関を比べると（勿論、岡崎国立共同研究機構（当時）はダントツでしたが）、私が24年間在籍した私大は全国で8番目で、旧帝大でそれより低い大学が3つもあることを発見しました。私はその大学に在職中、大学の化学系論文の約1/4を（共著者と共に）報告しており、私達の論文がその大学の引用数を引き上げている事が直ぐに判りました。十把一絡げではない側面を発見でき、密かに溜飲を下げました。しかしそれ以上に、数年前に米国の科学情報検索機関からメールがあり、論文引用度が高い世界の化学者のインターネット情報を改訂するに際して、インターネットで公開される200余名の化学者の中に私も入るので、個人データを送る

ように連絡が来ました。何が原因で私のような経歴の者がそのような想像もなかった事態になっているのか判らない上に、この機関についての知識がありませんでしたが、ともあれ言われるままデータを送りました。この事がある人に言いましたら言下に「self citationは意味がない」と、退けられました。私は若い時、人の論文を読んでも真似できる状況ではなかったので、私達自身のそれ以前の仕事を頼りに研究を積み重ねていましたので、確かにそんな側面もあるだろうと思いました。科学の世界の評価と言えども実態を反映していない事が多いと言うことを言われているのだと思いますが、世界水準の「生データ」ですし、私のデータの殆どの部分は若いときに苦勞して積み上げていた研究の集積によるものだと思いますので、私が辿ってきた道を考えると、やはり常識では考えられないことなので、どういわれようと勝手に溜飲は下がる…という感じでした。

何はともあれ、分子研に約12年間滞在させて頂いて、遅まきながら見聞を

広げ、仕事を発展させる事が出来ました。分子研の12年がなければその前の努力も消えてしまったのではないかと思います、分子研への門戸を開きチャンスを与えて頂いた事に対し、深甚の謝意を表します。また、お世話になった、伊藤、茅、中村の3所長、研究室の皆さんへの感謝は言うまでもありません。研究費の申請、研究会の開催、実験の遂行、事務処理等について多くのご協力を頂いた、薬師教授、加藤技術課長を初め教職員の皆様にも感謝いたします。

萩原朔太郎の散文に「坂のある風景は…ノスタルジアの感じを与えるものだ…」と言う文章があります。分子研に勤めることが決まってから最初に岡崎を訪れ、殿橋を渡っていた時に、急にこの文章を思い出しました。多分、橋が両側から緩やかに登るような傾斜をもって作られているためですが、橋の中央から下の乙川の岸辺を見たときに、はるばる流れ着いた自らを思い出しました。もう一昔以上前のことになりましたが、その夕暮れの風景を何時までも忘れないのではないかと思います。

分子研を去るにあたり 2

分子研と私

松本 吉泰

京都大学大学院理学研究科 教授

(前 分子スケールナノサイエンスセンター 教授)

まつもと・よしやす / 京大工学部（工業化学）卒、同大学院工学研究科修士課程修了後、1981年東大大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。米国ピッツバーグ大学、理化学研究所の研究員を経て、1990年分子研（電子構造研究系）助教授に就任。1997年総研大（葉山）に教授として転出後、2004年分子研（分子スケールナノサイエンスセンター）教授として復帰。専門は分子分光、表面科学、光化学。2006年日本化学会学術賞受賞。



私が助教授として分子研に赴任したのが1990年である。1997年に先導科学研究科を立ち上げるために総合研究大学院大学葉山本部に転出し、2004年に再び分子研に戻った。そして今春の

京都大学大学院理学研究科への転出である。葉山に在籍する間も総研大の一基盤機関としての分子研とは何かにつけてつきあいがあったし、また、大学の運営に関していろんな面で分子研に

支えてもらった。したがって、旧電子構造研究系の助教授として分子研に赴任してからの17年間は、7年間の葉山への「出向」を挟む共同利用研での研究と教育という意味で一つなぎの期間として今の私には感じられる。

30年ぶりに私の生地である京都に戻った。この地で私は研究者の道をめざしはじめた。ご承知のように分子研は2005年に開設30周年を祝ったから、私の研究者としての歩みと分子研のそれとは時期がほとんど重なっている。私にとって分子研はすばらしい研究環境と優秀なスタッフを抱える物理

化学のフラグシップとしての研究所であり、一度はそこで研究生活をしてみたいと夢見た場所である。そして、実際に独立した研究者として私を育ててくれた研究所である。歴代の所長から受けた精神的、財政的な支援、分子研の優れた研究環境がこれを可能にしたことは言うまでもないが、分子研といういわば桎梏に上げてもらったという緊張感が研究者として自立する上できわめて重要だったという気がする。

このように分子研は私にとってたいへん貴重な研究所であるのだが、最近の分子研を取り巻く環境において気になることもある。助教時代とは異なり葉山から分子研に戻ってきてからはいろいろと研究所の運営に関与する機会があった。折しも私が分子研に復帰したときに全国の大学共同利用機関と国立大学が法人化された、この大きな制度変更にもかかわらず、大学共同利用研として分子研は人事を含む研究所の運営に所外の分子科学コミュニティからの参加が可能となるような法人化前と実質的には変わらない仕組みが構築されていた。運営会議委員

などに選ばれた所外の先生方にはそれぞれの所属大学での忙しい業務の間をぬって分子研に駆けつけていただき、運営に関する重要な仕事をさせていただいている。所外委員の先生方の献身ぶりにはもちろん頭が下がるし、分子研の一員としてはたいへん有難いことであった。しかし、その一方で開設以来30年以上を経た今、分子研と分子科学コミュニティとの関係はかなり変わってきたのではないかと感じる。この間、分子科学の領域は広がり、分子研にも新たな分野の研究者が多く赴任してくるようになった。これは自然の成り行きで研究所としては健全なあり方なのだが、それに応じて分子研がよってたつコミュニティは拡大したが、逆にその実体がだんだんはつきりなくなってきたような気がする。またその結果、分子研と所外のコミュニティとの関係が希薄になってきてはいないだろうか。

法人化されて以来、どの大学法人も自分たちの足元を固めるのに汲々としている。とても他人事まで手が回らないというのが本音かもしれない。しか

し、このような状況は分子研のような共同利用機関にとってはきわめて憂慮すべき事態である。分子研はそういうことを気にせずいい仕事をすればそれでいいのだという考え方もあるかもしれない。ただ、それでは共同利用機関としての役割を本当に果たしていることになるのかという疑問が残る。

このような状況に対してどのように対処すればいいのかが私が明確な処方箋を持ち合わせているわけではない。ただ次のことは言えると思う。分子研はその独特の人事政策により、今日に至るまで極めて多くの分子科学者を所外に送り出してきた。分子研出身者は所外で分子科学の諸分野をさらに開拓し、拡張してきている。法人化後の喧騒の中で、ややもすると学術の意義が軽視されがちな現在にこそ、これら分子研出身者がやはり分子研のコミュニティの構成員として重要な役割を果たさねばならないのだろう。私もこれからはコミュニティの一員として分子研を支えて行きたいと思う。

分子研を去るにあたり 3

分子研での10年を振り返って

猿倉 信彦

大阪大学 レーザーエネルギー学研究中心 教授
(前 分子制御レーザー開発研究センター 助教授)

さくら・のぶひこ / 2006年1月より現職
大阪大学レーザーエネルギー学研究中心
パワーフォトリクス研究部門 教授
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-6
E-mail: sarukura-n@ile.osaka-u.ac.jp

激光XII号を背景にレーザーガラスを持って



私が分子研に在籍したのは、1996年2月(32歳)から2005年12月(42歳)まで専任助教授として、2006年1月から2007年3月まで兼務でレーザーセン

ターに在職しておりました。これまでの人生の4分1、研究している時間の半分を岡崎で過ごしたことになります。およそ10年、岡崎にいたため大阪にいつ

もしばらくは、どうも転職したのがピンとこない状態でしたが、今年のお正月ごろから、過去のこととして岡崎をある程度認識できる感じに気分が、やっと切り替わったところです(原稿が遅れた原因の一つはこれです?)。

分子研に来ることになったきっかけは、東大物性研の恩師である渡部俊太郎先生から、吉原経太郎先生に分子研で助教授の話があるから応募してみないかと連絡があったから、書類を準備せよとの電話を受けたのがきっかけでした。分子研に行ったこともない、駆け出しの理研の研究員を32歳で助手付き予算付きで、あ

る程度、勝手気ままに研究できる助教授に抜擢してくださるのでから分子研も太っ腹です。分子研から期待されたミッションを達成できたかはやや疑問ですが、私自身は大いに分子研を楽しみ感謝しております。

まだまだ若いと勘違いしていましたが、私も44歳になり、ちょうど研究を始めて定年するまでの折り返し点にきている感じがするので、今までの自分の研究生生活を振り返ってみたいと思います。私自身が研究の見習いを始めたのは、1986年 理工学科の田中昭二先生のところで超伝導薄膜の研究で卒論させていただいたのが、この世界に関わりだした始まりです。なぜ田中研に行かせていただいたかと言うと、当時大変高価であった分子線エピタキシー装置が理工学科で唯一あったからで、当時、光コンピュータのための新素材研究なるものが重要ではないかと勝手に思い込んでいた私のいい加減な耳学問の結論では、分子線エピタキシー装置を用いて新薄膜光材料を開発するのがそのための第一歩であると信じ込んでいました。すこし研究のお手伝いをして分かった事は、素材研究の地道さと高度な研究労働集約性と それをリードする人材の層の厚さと群を抜いた優秀性です。偶然にも高温超伝導当たり年であったためかもしれませんが、当時の田中研の周囲にいた学生やスタッフの5割は今でも著名大学の有名教授として活躍しています。(全盛期の長倉研も多分この様な感じであったのでしょうか) そこで私が思ったことは、こんな層の厚いところで下働きをしても浮かばれるわけがないと思い大学院で他に移動しようとして3ヶ月で決断しました。今にして思うと大変いい判断です。

そこで壁を迂回することを考えた私は、まず光コンピュータの材料の研究ではなく、そのための光そのものを研究したほ

うが得策であろうと思い、高速の光演算を可能とする光スイッチや光パルスの研究をしたいと思い、大学院の研究室を調査しました。超短パルスレーザーをやっているところはシャープな感じで、人材の層の薄そうなところといった意味でまさに求めていた研究室が物性研にあり、渡部俊太郎先生の研究室に進学しました。そこで、超短パルスエキシマレーザーと高次高調波の発生研究に参加させていただきました。当時の物性研は学生が少なかつたため、頑張ればいいチャンスがすぐ与えられました。参加した仕事は大概成功して、チームの力と分野のタイミングのおかげでかなり自信が付きました。研究の見習いが上手に行ったので、チーム型研究ではなく、個人型研究で光コンピュータにつながる研究をしようと再び思い、博士課程には進学せずに企業研究所に行こうと決断しました。

矢島先生の退官に伴い石田祐三さんが、バブル最盛期の輝けるNTT基礎研に行くことになったので、運よく一緒に連れて行ってもらいました。そこで、運よくチタンサファイアレーザーのモード同期を、ほぼ世界で初めて実現させ、安定な超短パルスレーザー光の発生に成功して結構気分がよかったものです。当時のグループリーダーは、山本喜久先生(現スタンフォード大教授)、周囲には、井元先生、北川先生、小川先生(現阪大教授) 上田先生(現東工大教授)、樽茶先生(現東大教授)や、我らの宇理須恒雄先生(現分子研)などスター研究者が数多く存在しておりました。企業の研究所は資金もありMITやスタンフォードの人脈もいい感じではありましたが、もっと勝手気ままにいろいろな人たちと共同研究したくなってきたので、理化学研究所 仙台の瀬川勇三郎先生のところで、材料と光科学の接点といった感じの研究を開始しました。その後 長く一緒に研究をし

た劉振林君(現在、米国のIMRAでファイバーレーザーの研究に従事)や和泉田真司君が当時の協力者でありました。その後 二人は総研大生として岡崎についてくれました。結構、楽しく世界中を飛び回り、新素材を集めていろいろな共同研究をしていたのですが、運よく分子研から声がかかり助教授に採用していただけました。勝手気ままな研究生生活のため当時はお恥ずかしながら学位を取得しておらず、伊藤光男所長にずいぶんとしぼられたのも今となってはいい思い出です。比較的、若く助教授にしてもらったのは幸運でありましたが、助手候補を探すのにずいぶんと苦勞して結局、物性研の末元先生のところを出た大竹秀幸君を渡部先生に紹介していただきました。引っ込み思案な私と好対照で外向きな性格の彼は現在 アイシン精機で活躍しているようです。彼が連れてきた理科大の小野晋吾君が私のはじめて指導した学部学生で、なんと32歳と20日で、名古屋工業大学の助教授に栄転していきました。レーザーセンターの秘書の林口僣子さん、研究室秘書の鈴木さとみさんや分子研の影の所長であった鈴木優子さんのおかげで、私自身は、ほぼ雑用フリーで研究そのものに関わる活動に専念できたのは、今となっては大変幸運でした。ひょっとしたら私のいい加減な性格を恐れて雑用が逃げていったのかも知れません。

総研大生として、今メガオプトで活躍している小関俊政君や、防衛庁の研究所で頑張っている鈴木祐仁君、しばらく電通大の助手として研究を続けた高橋啓二君、現在、IT関係の企業を立ち上げつつある川畑栄二君など多くの若者が参加してくれました。また、分子研の素晴らしいところはポストドクをかなり潤沢に手当てしてくださるところで、今でも中村宏樹所長に大いに感謝している次第です。初代ポストドクの小豆畑敬さんは現在

弘前大学で准教授になりました。栗原一嘉君は不屈の精神でまだポストクを続けているようです。村上英利君は現在阪大のレーザー研で大型ガラスレーザーの建設の専門職として活躍しています。リヤド君は母国の大学で教鞭をとっています。後藤昌宏君は特許事務所で活躍中、アレックス君は、現在日本で技術系の会社に就職、エスタシオ君は阪大で私と一緒に研究を継続中です。アレックス君が連れてきた、4人のフィリピン人総研大生のうち2人は現在も私と一緒に研究をしています。フィリピン大修士主席であったマルーさんは、学振特別研究生に採用されています。国費留学生のギルバート君は、3年で学位を取得後、日本企業の現地法人の管理職技術者として4月に帰国しました。ベトナムからの国費留学生のミン君も大阪で学位の取得に向けて努力中です。

また、ずいぶんいろいろな方に新しいことを教えていただいたり、研究を助けていただいたのもいい思い出です。小杉信博先生にはUVSORのマシナタイムなど、多くの配慮をしていただきました。西信之先生には学術創成での研究で数々のインサイトをいただきました。茅幸二前所長の新プロでは数々の新挑戦をさせていただきました。ま

た、UVSORの酒井雅弘さんには、低温、真空技術や分析、PC環境にいたるまで大変助けてもらいました。技術課の酒井楠雄課長や加藤清則課長にはずいぶんお酒を飲ませていただきました。また管理局の多くの職員の方々には、書類不備等で多数の迷惑をおかけしたにもかかわらず、親身に支援していただきました。岡崎の多くの方に感謝しております。

分子研の10年は、血気盛んなガツガツした駆け出し研究者から そこそそ物分りのよい中堅研究者への連続的接続点として貴重な時間でした。今でも岡崎付近を新幹線で通過すると、分子研での研究生活だけでなく、息子とそこら中、ドライブした楽しい思い出がよみがえります。時間がたつにつれて、多分もっといい思い出になるような気がします。

最後に、この場をお借りして、現職場の紹介をさせていただきます。レーザーエネルギー学研究センターはレーザー核融合研究センターと超電導工学研究センター（テラヘルツ部門）が3年前に統合された大阪大学の附置研究所になりました。レーザーエネルギー学研究センターは、高出力レーザーを用いて、超高密度、超高温、超高压など、

他に類を見ない極限的な物質状態を作り出し、レーザー核融合や実験室宇宙物理等を研究・開発する学術融合型の新領域「高エネルギー密度状態の科学」の開拓を旨としています。また、テラヘルツ波からX線、ガンマ線に至る幅広い周波数領域の高輝度電磁波や高エネルギー荷電粒子の発生とその応用研究も進めています。レーザー核融合は人類の持続的発展に必要な環境負荷の少ない新しいエネルギー源の開発を目指すものです。コンパクトなレーザー核融合炉の実現に向けて新方式レーザー核融合「高速点火」の可能性を追求しています。一方、極限的な「高エネルギー密度状態の科学」では、相対論プラズマ物理、レーザー核・素粒子科学などの新しい学術分野の創成も目指します。高出力レーザー生成の電磁波や高エネルギー粒子ビームは、小型加速器、次世代半導体デバイスの開発に必須の極端紫外（EUV）光源、非破壊検査、リモートセンシング、癌診断・治療などへの応用研究も進めています（HPより）。

ここでの私のミッションは、従来のこじんまりした研究に加え、主力レーザー装置 激光12号の更新と運営の管理（この部門だけで30人を超える人員あり）と、新しい高出力レーザーの応用開拓にあります。

分子研を去るにあたり4

分子研で得たこと、学んだこと

森田 明弘

東北大学大学院理学研究科 教授
(前 計算科学研究センター 助教授)

もりた・あきひろ / 1988年東京大学理学部化学科卒、1990年同大学院理学系研究科相関理化学専攻修士課程修了、1992年京都大学大学院理学研究科化学専攻博士課程中退、同大学助手を経て2004年計算科学研究センター助教授、2007年4月より現職。同じく分子科学研究所計算分子科学研究部門教授（併任）。



計算センターから仙台の東北大学に移って数ヶ月たちましたが、分子研との併任で岡崎と行ったり来たりの日を送っております。まだ岡崎を離れたという気がしないのですが、私自身の生活は今年度になって激変しました。分子研に専任の時代の伸び伸びとした生活が懐かしく思われます。

例えば分子研に赴任したのは3年半

前のことですが、それまで長く助手をして展望の見えない日々を送っていただけに、分子研の明るく恵まれた環境はまぶしいくらいに感じられました。分子研は研究所をあげて若手の研究者を応援しようという気概があふれていて、私にとって理想的な研究環境のありかたのイメージを形作ってくれました。人生のある時期、多くの人との出会いや刺激と研究をいっぱい楽しむことを許される機会に恵まれたことについて、中村所長や岡崎センター長をはじめ、心から感謝しております。

計算センターに赴任する前にはセンター運営の業務の大変さについて、周りの人たちからずいぶん脅かされましたが、実際に働いてみると所の方針お

よび周囲の配慮や優秀な支援スタッフのおかげで過大な負担とはならなかったと思います。むしろ共同利用施設のスタッフを代表して日本の分子科学コミュニティの世話役として働く場面が多く、多くの人たちとのネットワークが広がる機会となりました。こうした計算センターならではの特色を分かってもらって、私の後任にも沢山の応募があってほしいと思います。

また分子研の理論系と計算系が中心になって推進しているナノグリッド(NAREGI)や次世代スパコン・ナノ統合拠点のような大型の国家プロジェクトの運営に直に関わりあうチャンスは、私のようなヒラの助教授だった人間では普通はありえないことでしょう。平

田先生、岡崎先生をはじめプロジェクト運営の責任を担っておられる先生方の途方もないバイタリティと活躍ぶり、および日頃の白熱したけんか腰の議論(?)を身近に経験する機会は、私にとって極めて貴重で陰に陽に多くのことを学ばせていただいたと思っています。

現在は仙台の地で、新しい研究室の立ち上げと日々の責務に奮闘しています。まだ始まったばかりで仕事の全貌がつかめている感じは全くしませんが、教授職に伴う責任の重さに堪えられるよう、私自身も新しいスタートだと感じています。今後は分子研を外から応援する立場となりますが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

分子研を去るにあたり 5

分子研を振り返って

高橋 一志

東京大学物性研究所 助教
(前 分子集団研究系分子集団動力学研究部門 助手)

たかはし・かずゆき／東京大学理学系研究科化学専攻博士課程修了後、JSPS特別研究員、(財)神奈川科学技術アカデミー研究員を経て分子研へ、現在東大物性研究所助教。



分子研には2003年4月から2006年10月まで約3年半在籍しておりました。分子研を離れてから早半年以上経ちますが、今改めて思い返してみると研究面でも私生活の面でも本当にいろいろとあり非常に充実した時間を過ごすことができました。この間多くの人々にお世話になりましたので、この場を借りてお礼申し上げたいと思います。

まず何より分子研に来るきっかけを作ってくださいました当時小林Gの助手であった藤原さんに感謝したいと思います。私が初めて小林先生と出会ったときのことが忘れられません。小林

先生がPDを探しているということで話を伺うことになっていたのですが、藤原さんのところを尋ねてみると小林先生がいらして「高橋君はいつごろ来るのかな?」というようなことを私がいる目の前で言われたことです。皆さんも良くご存知かと思いますが、小林先生の周りの細かいことをあまり気になければ分子研へ来ていなかったかもしれません。このような感じで研究に関しても非常に自由にさせていただきました。藤原さんには岡崎の食についてもいろいろ伝授していただきました。

毎日違うお店で夕食を取るということで3ヶ月以上続けることができたのは記録ではないでしょうか。小林Gに在籍した人は体のボリュームが増大する傾向にありましたが、このあたりが原因だったのかもしれませんが。

また、他の小林Gのメンバーもフレンドリーで楽しく過ごすことができましたし、大変お世話になりました。なかでも子供連れでの忘年会やお花見などはこれまでにない経験でした。外部の方との共同研究も多く、数多くの人とも知り合いになることができました。また、外部の方が来られると必ず飲み会があり、研究に限らずいろいろな話を夜遅くまでした記憶も甦ります。

研究室外でも自由な雰囲気でしたので、いろいろなことにチャレンジする機会を与えていただいた気がします。もともと合成をメインとしていましてあまり他のことを知らなかったのですが、分子集団、相関、理論の各研究系

の先生方からいろいろなことを教えていただきました。共通機器など装置については、分子スケールナノサイエンスセンターの技官の方々にトラブルの度にうかがうような感じで大変ご迷惑をかけたと思います。装置開発室の方々

には具体的にどうすれば分からない状態でこんな物を作って欲しいと相談する状態でしたが、それを具体的な形にさせていただきました。このように多くのことを経験できたのは分子研の自由な環境のおかげであり、今後その経験

を活かしていかなければならないと自分に言い聞かせております。

最後になりますが、このような貴重な体験をさせていただきました小林速男先生と所長の茅先生、中村先生に感謝申し上げます。

分子研を去るにあたり6

出合いは人生の宝

松本 健俊

大阪大学産業科学研究所高次制御材料科学研究部門 助教
(前 分子スケールナノサイエンスセンターナノ光計測部門 助手)

まつもと・たけとし / 1996年慶応義塾大学理工学部化学科卒、2001年東京工業大学大学院総合理工学研究科物質電子化学専攻博士課程修了、南カリフォルニア大学博士研究員、2003年筑波大学大学院理工学研究科ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー研究員、2004年分子科学研究所助手、2007年大阪大学産業科学研究所助教



2004年8月から2年と少しの間、分子研で大変お世話になりました。公私に渡りご指導下さいましたたくさんの先生方、研究仲間、そして、おぼつかない事務手続きを最後まで見て下さいました秘書、事務、司書の方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

大学時代の同期二人が同じ階にいるという稀有な再会から、私の分子研の生活はスタートしました。その後も、分子研内での共同研究、様々な学会、セミナー、時には忘年会を通して、多くの魅力的な先生方や研究者の方々に会いし、色々な物の見方や考え方を教えて頂きました。特に、これまでは、表面科学や触媒化学の分野の方との交流が主でしたが、分子研に来てからは、主に物理化学の分野の方と交流させて頂き、新しい刺激を幾度も受けたことを鮮明に思い出します。また、花火委員やソフトボール大会に参加したことで、普段あまり交流のない研究室の方々と出会えたことも、大きな財産となりました。さらに、妻と出会えたことも

考えると、岡崎にポツンと取り残された研究所という分子研に対する第一印象は、大きな間違いだったように思います。

今年から、より産業界と関わりの深い阪大産研に異動になりました。これを機に川合知二先生、谷村克己先生、磯山悟朗先生など多くの分子研の大先輩にお会いすることができ、分子研に対するイメージをさらに新たに致しました。また、現在、産業界で長年活躍されている先輩方との出会いもあり、社会貢献における基礎研究の役割、そして、研究者として持つべき哲学について、色々考える機会も頂戴しております。今後も、分子研が、貴重な出会いを通して、様々な分野で必要不可欠とされる研究成果だけでなく研究者や教育者もが、育ち続ける場となることを心から切に願っております。

最後に、私も食事場所には大分困りました。木下一彦先生や奥村久士先生にならって、車で繰り返し行った店、行きたかった店（分子研関係者に会わ

なかった編＝デートスポット？）をリストアップ致しました。お役に立てれば幸いです。

【岡崎市内】

大地のカフェ（岡崎市長和町字南天白27-3）
健康的なメニューで味も抜群だが、値段は庶民的なバイキング。

SERENO（岡崎市美術館内）
岡崎随一の夜景も美しい。

スバカマナ（愛知県岡崎市材木町1-18）
本場のインドカレー。チーズナンが最高。

TOY BOX（岡崎市洞町宮の腰19-4）
元ガーリックバター。食材と味も逸品だが、気軽でお洒落な雰囲気特にいい。

【岡崎市外】

魚福（半田市堀崎町1-14）
江戸前寿司の原形と言われる尾州の早寿司を出す料亭。

うな慎（浜松市馬群町2476-227）
うなぎの刺身、白焼きが絶品。

オーキッドガーデン（全日空ホテルグランコート名古屋2F）
デザートもおいしい長蛇の列ができるバイキング。

分子研を去るにあたり 7

分子研の思い出

小野 晋吾

名古屋工業大学大学院工学研究科 准教授
(前 分子制御レーザー開発研究センター 助手)

おの・しんご / 1974年9月10日生。2002年東京理科大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了、同年、学術振興会特別研究員、2003年より、分子科学研究所分子制御レーザー開発センター助手、2006年より、名古屋工業大学大学院工学研究科准教授、現在に至る。紫外光源及び検出器の開発に従事。



昨年10月に名古屋工業大学に異動してから、あっという間に半年あまりが過ぎました。今は研究所にいた時と違って講義もありますが、やはり大学との一番大きな違いは学生の数でしょうか。周りにたくさんの学生がいる今の生活にも次第になれてきましたが、昼でも人の少なく落ち着いた雰囲気の分子研が懐かしく感じます。

懐かしいといえば、私が始めて分子研の敷地に入ったのは、高校2年生の時でした。もう15年も前になります。学校帰りに分子研の一般公開に行ったのですが、私が写った写真が岡崎市の市民便りに掲載されたのでよく覚えています。しかし、その時は自分がそこで10年近くもお世話になるとは思ってもみませんでした。その次に研究所に

行ったのは、大学の先輩で当時猿倉研究室で助手をされていた大竹さんに誘われて、大学4年生のゴールデンウィークに見学に行ったときでした。猿倉先生の面白いキャラクターにもひかれて、その年の7月1日には、分子研にきていました。それからは忙しい毎日でしたが、分子研での生活は公私共に非常に密度の濃い充実したもので、私を大きく育ててくれました。研究面でもそうですが、ジョギングクラブでの練習、駅伝参加やテニス大会などの遊びの面でも、いい思い出がいっぱいです。

こんなに充実した生活が送れたのは、長らくお世話になった皆様のおかげです。この場をお借りして、心より感謝とお礼を申し上げます。

分子研を去るにあたり 8

岡崎での研究の巻

松尾 司

独立行政法人理化学研究所フロンティア研究システム
機能性有機元素化学特別研究ユニット 副特別研究ユニットリーダー
(前 錯体化学実験施設錯体物性研究部門 助手)

まつお・つかさ / 1994年東北大学理学部化学科卒、1999年筑波大学大学院博士課程化学研究科修了、博士(理学)。日本学術振興会特別研究員PD、筑波大学先端学際領域研究センター助手を経て、2001年4月～2007年3月まで分子科学研究所助手。現在、理化学研究所フロンティア研究システム機能性有機元素化学特別研究ユニットの副ユニットリーダー。



分子研では6年間お世話になりました。現在、和光の研究本館で研究室を立ち上げています。分子研での研究をふりかえります。

6年前、筑波大学の助手任期が残り僅かとなった私を採ってくれたのは錯体化学実験施設の川口博之准教授でした。川口先生とは面接の日に初めてお会いしました。私は構造有機化学で学位を取得しましたが、他分野の若い先生と一緒に研究する機会に恵まれました。

明大寺地区の南実験棟で研究を始め

ました。1年目は川口先生と名古屋大学異研究室の小室君(現 東北大学助教)と松尾の3人でした。研究所は大学とは雰囲気が違います。1人の研究者としてひたすら研究にのめり込んでいきました。新しい研究は楽しくもあり、辛くもあり、ビールをたくさん飲みました。有機化学と無機化学の考え方や文化の違いは強烈でした。真実をつかみ取るのは技術と感性だと思い知りました。たまたま応募した科学技術振興調整費が採択されてポスドクを雇うこと

になり、2年目からは人数も増えてにぎやかになりました。

ある日、茅所長から進歩賞に推薦するとの連絡を頂きました。所長は練習に2回もつきあって下さいました。高所からのアドバイスを頂きました。この練習会は大変貴重な経験でした。たまたま受賞したので良い思い出ですが、当時は大きなプレッシャーでした。進歩賞を受賞すると昇任するのが普通の大学ですが、分子研では内部昇格が禁止です。分子研での研究成果がうまくあがらないこともあり、焦りを感じていました。

4年目からは山手地区の新しい建物に移りました。中央実験台が8台並ぶ壮観な実験室です。この環境でダメなら研究者としてはダメだと思いました。カチオン性錯体を研究していた頃に、名古屋大学で国際会議が4日間続きました。日帰り出張が続くと疲れますが、

さぼらずに3日目の講演を聴いていた時に、ふと、二酸化炭素はカルボニル？反応させてみようと思ひらめいたのです。4日目の出張から戻った後、スーツ姿でNMRチューブ実験を始めました。アイディア通りなら¹H NMRの高磁場領域にメタンのシグナルが現れるはず。深夜まで反応追跡し、メタンのシグナルが増えていくのを確認した時には感

動しました。この日(2005年1月12日)世界で初めて二酸化炭素をメタンへと常温で触媒的に変換したのです。美しい究極の還元反応だと思いました。

二酸化炭素の研究をしていると、取り組むべきものの大きさにも気がつきました。自然と文明について考えるきっかけとなりました。6年間の任期の最終年度となり、方向性と進路について悩

んでいた頃、玉尾先生から声をかけていただきました。フロンティア研究システム長の玉尾先生のお部屋の隣は中央研究所所長の茅先生のお部屋でした。

分子研では多くの失敗を学びました。「大切なことは自然が教えてくれる」。川口先生の言葉が支えとなり今日も実験を続けています。理研でもきっとたくさん失敗することでしょう。

分子研を去るにあたり 9

岡崎を去るにあたり

榎 互介

名古屋大学大学院理学研究科物理学教室 准教授
(前 岡崎統合バイオサイエンスセンター戦略的方法論研究領域 助手)

まき・こうすけ / 1999年 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。1999年～2001年 産業技術総合研究所にて博士研究員。2001年～2003年 米国フォックスチェイス癌センターにて博士研究員。2003年～2007年 東京大学大学院理学系研究科助手。2007年 岡崎統合バイオサイエンスセンター 助教。現在、名古屋大学大学院理学研究科物理学教室准教授。



わたしが岡崎でお世話になりはじめたのは、着任する前にさかのぼります。桑島グループの岡崎統合バイオサイエンスセンターへの異動に伴い、山手2号館の新しい研究室の立ち上げの手伝いをさせてもらいました。研究室の整備についてまだ右も左もわからないとき、事務・技術スタッフの方々をはじめ、

みなさま丁寧に必要なことや行うべきことを教えてくれました。また、研究をやりやすいように最大限わたしたちの希望にそったレイアウトを実現してくださいもしました。研究室の設備についても、今まで見たことがないほど充実しており驚かされました。

実際に岡崎統合バイオサイエンスセ

ンターに着任してからは、家からてくてくと10分くらい歩いて研究室に通っておりました。岡崎は落ち着いた雰囲気のみで、わたしだけでなく家内や子供にも過ごしよい環境をあたえてくれました。研究所内は、静かで、研究に没頭することができる環境だと思います。また、頻りにセミナーが開かれており、それをひよいと聞きに行くことができるのも、もしかしたら岡崎ならではの、ではないでしょうか。わたしは、岡崎の研究機関に研究における梁山泊という印象を持ちました。

この6月に名古屋に異動しましたが、今後も岡崎で経験させてもらったことを生かしていきたいと思います。

分子研を去るにあたり 10

分子研で得たもの

吉井 範行

姫路獨協大学薬学部 准教授
(前 計算科学研究センター 助手)

よしい・のりゆき / 同志社大学工学部卒、東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。博士(理学)。学振特別研究員、(財)電力中央研究所主任研究員を経て、2003年9月より専門研究職員として計算科学研究センター岡崎グループに加わる。分子研助手を経て、2007年4月より姫路獨協大学准教授。現在に至る。



分子研には2003年9月より2007年3月まで、3年7か月の間お世話になりました。はじめはNAREGIプロジェクトの産学官連携研究員として採用されましたが、その後、プロジェクトが次世代スパコンへと変わり、最後は身分も助手へと変更していただきました。

もともと東工大において岡崎先生(現計算科学研究センター長)のご指導のもと、分子シミュレーションを用いた

研究で学位を得たのですが、そののち電力会社の中央研究機関である(財)電力中央研究所に籍を置き、熱工学の研究に携わっておりました。この期間は、熱物性に関する研究を行っていましたが、一方で、現在では広く知られるようになったエコキュートの開発に向けた基礎研究にも関わらせていただき、本当に良い経験をさせていただきました。

そんな折、NAREGIプロジェクトへお誘いいただきましたので、予てより分子研の素晴らしい研究環境にぜひとも身を投じてみたいという思いもあり、正職員からポストドクへの転向ではありましたが、思い切って転職することにいたしました。

分子研での最初の仕事は、理論系グループ、計算科学研究センター合同での、平田先生ご推薦の永源寺見物+三河湾の温泉での大宴会の幹事を、当

時平田グループにいた山崎さんと二人でさせていただいたことでしょう。NAREGIが始まったばかりでしたので、その事務局の方々も参加され、非常に大勢での楽しい旅行になりました。

研究に関しては、NAREGIプロジェクトの全計算機資源の約半分を、一か月以上占有する大規模計算を行ったことが印象深いです。ミセル生成の自由エネルギー計算を計画しましたが、準備期間が短かったため、実施直前は正月返上で大変でした。占有計算が進むにつれ、徐々に結果が見えてきた時には、本当に救われた思いがしました。ミセルに関する一連の研究が順調に走り出せたのも、この初めの苦しみがあったからに違いありません。

また、所外との共同研究やプロジェクトのためのプログラム開発、サマースクールの主催、学会研究会のお手伝いなど、さまざまな仕事に関わらせて

いただき、良い経験を積むことができました。特に、東北大理学部の福村研の梶本さんが、非常に粘り強く研究を続け、2成分溶液系の分子シミュレーションで、実在する分子で初めて下部臨界点を再現でき、相挙動や2相の界面構造の研究を可能にしたのは、まさに努力と忍耐力の賜物だったように思います。

分子研では、先生や仲間にも恵まれ、いつでも研究について議論ができ、本当に大きな恵みを与えられたと感謝しております。金沢大学に移られた三浦さん、岡崎グループの山田さんや三上さん、安藤さん、計算科学研究センターの岩橋さんとは、昼夜を問わず本当によく議論をさせていただきました。そして岡崎先生にはすべてにおいてお世話になりました。分子研の皆様には、まだまだお世話になることも多いと思うのですが、まずはお礼を申し上げたいと思います。

分子研を去るにあたり 11

角間の里からこんにちは

三浦 伸一

金沢大学自然科学研究科数物科学専攻 准教授
(前 計算科学研究センター 助手)



みうら・しんいち / 1966年愛知県安城市生まれ。1990年京都大学理学部卒業、1995年京都大学理学研究科博士後期課程修了、その後ペンシルバニア大学博士研究員、1996年東京工業大学総合理工学研究科助手、2002年分子研助手を経て2007年1月より金沢大学にお世話になっています。

分子研には2002年7月から2006年12月まで4年半程お世話になりました。長いようで短く、短いようで長い4年半でしたが、顧みればあっという間のことであったような気がします。分子研を去ってからまだ半年あまりですが、振り返ってみると周りが左党ばかりということもありよく飲みました。何を話していたのか詳細に思い出すことは

できませんが楽しい思い出のひとつです。また、私は計算センターの助手として過ごしたのですが、水谷さんを筆頭に技術職員の皆様にはお世話になりました。皆様のご助力がなければ大変なことになっていたことでしょう。私の近況としては、不慣れな授業の準備や研究グループの立ち上げなど、なかなか落ち着きませんがぼちぼちとやっ

ていこうと思っています。またできうるならば金沢大学発の新しい研究を展開したいなと思案中です(が、なかなかまとまった時間がとれない……)。最後にごく簡単に金沢大学の紹介をしておきましょう。大学のほぼ全てがある角間キャンパスは緑に囲まれた著しく良い自然環境にあります。冬場にはキャンパス内で野生の熊と触れあうこともできます。実際出会った時に楽しくお相撲を取るのか、あるいは残念ながら血の惨劇になるのかは各自の運氣次第ですのでご注意ください。あまりに簡単すぎてさっぱりわからないという方は、百聞は一見に如かず、角間へ是非お越しください。これからも分子研の皆様には色々とお世話になることと思います。今後ともよろしく願いいたします。